

## 技報発刊に寄せて

この「技報」は、工学研究科・工学部技術部の平成 26 年度における諸活動をまとめたものであり、部局内外の教員並びに関係する皆様に技術部の活動内容を発信するものです。

ご高覧いただき忌憚のないご意見を頂ければ幸いです。

また、本誌の発行にあたって、多大なご尽力とご支援を頂きました工学研究科長・副研究科長をはじめ、教員、事務職員、その他の関係各位には心よりお礼申し上げます。

ここからは紙面をお借りして、私事ではありますが、この 3 月で定年退職を迎えますので、技術職員としての 42 年間で少し振り返ってみたいと思います。私は、昭和 48 年 3 月 16 日付で工学部応用物理学科工作室（以後応物工作室と記す）に文部技官として採用になりました。応物工作室には、平野誠一氏と行平憲一氏が在籍されておられ、当時としてはめずらしい（と記憶していますが）学科全体の工作室であり、8 つの実験講座から依頼を受け実験装置や部品の設計・製作・開発を行っていました。採用早々に、平野氏から大型装置を東北大学まで運ぶため二人とも出張するので休暇を取ってほしいと言われ面食らいました。その装置は、中性子線回折用 4 軸ゴニオメーターであり、自分は、このような大型装置を設計製作できるのかと不安を感じたことを強く覚えています。私の後に、鷲見高雄氏が採用され 4 名体制となりました。昭和 55 年に講座から涌井義一氏、昭和 57 年には、人口結晶から小塚基樹氏が加わり 6 名体制となりました。その後は、平成 3 年に行平氏が静岡理工科大学へ転出され、平成 7 年には平野氏が定年退職され再び 4 名体制となりました。その間に大学院重点化や工学研究科・工学部技術部設立を経て、平成 16 年からは、全学技術センターが設立・試行され、センターの所属となり現在に至っています。

応物工作室は、工学部に応用物理学科が創設と同時に創設され、理学部金工室から移籍された平野氏がまとめ役を担っておられました。その関係で理学部金工室と交流があり、月 1 回の勉強会が行われていました。この勉強会が、私の原点であったように思います。工学部と理学部支援するところは違っても装置を製作することに於いて何も違いはありませんが、勉強会によって、理学部金工室等の技術職員がされる話や討論により、いろいろな知識を得ることができ技術職員としての基礎を築くことができたと思っていますからです。また、昭和 50 年頃と記憶していますが、理学部金工室におられた高橋重敏氏が岡崎の分子科学研究所技術課長として赴任され、ご尽力により技術研究会が全国規模で開催されるようになりました。現在では、3 研究所（分子研、高エネ研、核融合研）や大学での開催と拡大しています。また、機器分析技術研究会、実験実習技術研究会も開催されるようになり、全国的な技術研究会として大いに発展した会となっています。このような全国的な研究会の創成期から何かしらの関わりが持てたことを誇りに思っています。纏まりのないことを書きましたが、定年まで無事に務められましたのも、全学技術センター長を初めとする教員の先生方並びに事務職員の方々や技術職員の方々のご理解、ご協力の賜物と感謝しております。長い間、誠にありがとうございました。

平成 27 年 2 月

工学研究科・工学部 技術部  
（全学技術センター工学系技術支援室）  
室長 熊澤克芳